



7 3  
3680





檢使券

9

3保3  
3680



保 3  
番 3680  
巻

子負換使

子負換使の事

明治四十二年七月  
小久江成一  
氏寄贈



一 換使者之役ありて二人宛行役也我昔時の人の  
任とて亦少くも人少くも知れんをて下役も換目人  
目付も於おほし依怙負具あるを今もはるのたは  
一 雲岫の海より限一物子負も不便氣を去るをいへ  
中流とて亦あやふき此氣を去るれんは子負とてたは







有り疵あまうひとし安(知)りはたふとの陰使  
よりの時とあまの神をの後ののあまの疵ふと  
けむらとあまといふことと疵あまの付き

一 白身はあまの疵ふことと疵あまの付き  
云(く)と、氣と張(は)つ海(う)まことと一 白身は氣性  
首尾と答(こ)へ一 白身は氣性のあまの疵ふことと疵

のあまの疵ふことと疵あまの付き  
可(か)と見(み)るまことと疵あまの付き  
のあまの疵ふことと疵あまの付き  
あまの疵ふことと疵あまの付き  
あまの疵ふことと疵あまの付き  
あまの疵ふことと疵あまの付き  
あまの疵ふことと疵あまの付き



指し北宗くは右を兼ふはあつたははひのむら

るこの時言説はあひあひの肩をたをくは

けしとととと

しを科来りてまて時か減る之言とを科の之方と言

ありぬらおむらうすしを科にけりしはこれ海

とむめい減る足分より原くおんらたむしを科

いふと原はしをさし

一の科はを科の之方より海原はたすすし

向海也物共又右の言方のなりしは

甲とら

一想らるる成事立は本かを端を長くつたし

未の口の中をいりし申上りし中物共は



作らるる事うり事一し事

一 檢使來るときを思ふく和科の事又ハ瘰癧也

またお侍のうり事と立事(和科)と子息とある瘰

治法申付事返ら死瘰若くは其瘰治と

之ゆり法也思ふ事うり檢使ハ中命とある

口傳多うり

一 切殺され家者と命し事先死人の心府と

心家一處に其見及いふ誰かしてとそ尾を吐き也

られを其刻限と付く家別限とありことばよりの也

物とありて死骸と能ん瘰癧の向かひは人の心

瘰癧ののいちと東北とこくとんえした

あらしと者ハ心胃とて衣新致事又也



大町人より取りし口紙指し改めし事。

一 板紙の口紙役は付紙のちひさし可い事と申す

付申しを松の文落し紙より今の紙に改めし事

探見しるるの時の付紙のちひさし可い事

之より取りし口紙指し改めし事

一 切られし紙を古紙より新紙に改めし事

付見申し事

一 血と引紙の日取りし事と付紙中油の日記

取鼻紙は紙と紙の味し事

一 古紙の時死人より古紙を其始人の書人紙を採

取の者ハ採集口紙と申す事と古紙の日記を採

取し口紙の日記を採集し事と古紙の日記を採



身中は又先程の云う様に方々尋ねて云々と  
は方より云々同也——  
くらの換使汁又之限會は去る事ゆは之ゆめ  
けくお持出と理起とやうかい事幾かして之の  
おれし

一 月害く換使切殺されを方々此海法へ  
能く布の心裏物と取てあふれは  
成りしよく人他を禁所あつて物を付相死くの  
あひをあげさせりこれゆと——帯をもちて目  
害を方々搦指ふり、包丁の刺かりてさみ中搦指  
るよと取能えんし、疵口と見申し相うつぬせと成  
よるハあふれあふ——



奉也松平浪浪守の由あり此場回上野女をちと  
さこのと内自害も一にせ武列守小田京町の  
名之孫もつと云ふる麻心自害も一にせよ  
らきよんためよ安よ下一付るぬ

一 せ身自害もつら編指の柄もまぶらひのりうは  
人のこを病きとんもまひとんはせらるる

寸ののいひ編指にては大人かしては  
自害の事あるものうれは

一 此内とある事自害の此内はしれもは  
あしよがの目とよみよの口付多し

一 横にたふらひもつら編指の柄もまぶらひのりうは  
まはぬもつら編指の柄もまぶらひのりうは



ゆいほれうまうまうまのくぬの髪のかれりて  
髪とけくふま

一 自害は十石より重き者死するの半くも十石より  
重き者も死する者若くは十石より重き者も  
重き者も死する者若くは十石より重き者も  
重き者も死する者若くは十石より重き者も  
重き者も死する者若くは十石より重き者も

一 首とて死する事とて死する事とて死する事  
たるを撰使むる縄の付おしひとあゆまの  
男のしりもはひもあゆまの縄の付おしひと  
女のしりもはひもあゆまの縄の付おしひと  
ましては死する人の死する事とて死する事  
とて死する事とて死する事とて死する事



たふさぶよりをたふさ眼く目よと付一

一 孫使役者ある大車に役しお毎々入浴せよ

自れと人のさうなり歌れあはし

悪心持位あさくちるく丹しとのほしめ

よのめい車よして邪なりとお祈あくとよきお

長とくく神てたまのさよと申とるのり

一 松武列は上橋本町といふ可くは御所人の

妻継娘の業十二成とふくみては娘の乳母は

今令あところもお淡く一穀く一月言ま

新よ志くさくし甲好を流さくといは御町

換使と法をばるおといふといはと来く花と

春よの利いと持のといふといはと死せり



まゝにゆく。身もよきもの。いふに、これの故に

乳母らとが口書とらふゆゑ。おぼやかしや上りま

かとしとく。いふに、おぼやかしや上りま

とれ、おぼやかしや上りま。おぼやかしや上りま。

いふに、おぼやかしや上りま。おぼやかしや上りま。

おぼやかしや上りま。おぼやかしや上りま。

おぼやかしや上りま。おぼやかしや上りま。

おぼやかしや上りま。おぼやかしや上りま。

おぼやかしや上りま。おぼやかしや上りま。

おぼやかしや上りま。おぼやかしや上りま。

おぼやかしや上りま。おぼやかしや上りま。

おぼやかしや上りま。おぼやかしや上りま。



取内氣入るあはき——七つふふあま子まくとり  
この世に凡をおれとお果々るといふ不便は  
はのせつはあま子よは武をわきし下はれははの  
子の母はたまにお果洲乳母の女抱ふく成人——  
りれはあはよとれまき——みり——子とけり人の物  
さうしてあはの役をまんとし——とあまらま  
はあま子あまき——りらるるはえはあまらとあま  
ま——あまのあまられは清く上を夜あまを入あま  
はあまらういつの比らうはの乳母とあま——て  
中うく成乳母懐妊とあり——うはあまを祭うは子あ  
まはあまらうの役はあまらるるはあまをあま  
えん物あまらとあまら成るあまら——て



乳母と申侍して怪我は二階より落籠りて物を  
突抜死たると云ふまゝして二階のふく物と突抜  
下は落し乳母は死したる御て死後よはつと大  
声とあけうささけひらりとを承りて御付  
泣扱ひられともあつて死られりて  
侍之人は津上りられはあま捨使を泣扱ひれを捨  
使し上りの扱見の侍又乳母はあまのいこ  
是等在捨使人御にのりてはれはれ  
いのと物とめすおと君とていよし涙の  
ともり合のあはれりて皆ありて乳母  
のありて啼声しはれりてはれりて  
同業はれりてはれりてはれりて







山崎の陣に於ては、先づ陣取を以てしつそくは

任付の捨使役は、ち事成とのとらおのれど、日

定より、平柳と武士のさるよとこたへ

給ふとるれ

一軍中に見ると云事、人百携持るる由事と

事

大物なる事

一、大物んと云、人取四方の事、諸より解送、大に大に

送中、但し、おの多おより二十分、ちと、おと

一、おの道、是、宛定、候と云事、之、け、時、能、と

武、と、撰、石、連、て、お、事、し、お、ん、此、中、よ、お、ん、と

云、陣、取



一 中野見有六人おん北人数はしつとて言ふ

之へ一二十路甲子路を十路計のく敷山てお

る中おととき但人数よりて申とし大と

おんの損益はつとてさうくす

一 小おんと云ハ三人おるさふす又路と六指つふ

是北路の柳子款の備虚言とせん言なる

口舌とを付目小く見ぬのをさうして

毎せよと心ハおるさふす

改判す一但北路より

一 名一北路道足柳とさす之級ハ款集北間

林とすて休長北氣を五行の程成時ハ路地

足路とす二但おとつとてさうき場前ハ路地



立御相部合とくおんを公安くさるゝ是と違

甲是所と云くはは逆使と云ハ詔おんと逆使

討んをりめ右の道は所所と備と詔と清は

倉敷より日本備と詔と切あつと逆使と云

一 切んの青一見討つと云、物け比田也大山

一 小大河中河系は狭く唐及本立 岩

坂源相

一 追く詔陳は詔え知や一の多と傳文を

一 能者陳具とらう合お用ふれをさうれと云

一 て陳は詔と知く只をさうのゆゑとあるぬと

一 ともと云

一 我備を撤ふ詔追く詔と云やうと撤る詔は



湯が通く詔八備洗く湯が及らん氣立ちお

さやうをらむゆき測を見ふとくえんころや

してけうからと原上の廣めふとく押あ

はぶらうつじまき清みら備のふは夏本の白ぬ

あいたふうとくをら氣立ち細らうとハ

ぬけのこのことし押あんと上押あめけらるを

沈備ときし園麻車糸の立みやしも同か

一厚備と云事被ふ備なりしは服よ合我と物

下三軍までふひゆと先先と改改通自由の

備とあつさといさし又落備とらふら湯せ

只一重二重ふし何とくしうは又備のちを

備と云し程口傳之能くすまはし



一 軍場の北に普恵と見定る所あり

一 敵の進退敵此人殺積伏兵満河の谷川と

敵の敵不敵敵満河の敵のありふると北一定あ

りふると北城の早急不長を身は普恵夜軍

のわんめとるのんやいふらしまる軍

法より敵をあらへてあつて神とてさる

ちりまらり又神殺三まを去る顯物や自分

捨んん分し

一 敵候相為のおんをふりおのり北りふちる

との化指法大所しきりあき遠目か幅よん海

十女町おとよんせふて又りを可しとてあ

んゆかよのりれいさるれとてかんか



右ハ橋幅よりいさく見ゆらん所也  
人の足のとこいんせり

一 宿ちやしちん松の火方縄の火よとせり  
一 宿ちやしちん松の火方縄の火よとせり

宿の声の遠をいさく見ゆらん所也

宿ちやしちん松の火方縄の火よとせり

宿ちやしちん松の火方縄の火よとせり

むらさき也

一 橋見ハ一欵此人扱換者ニ由り立り  
揚子ハ欵味方の町間者又欵此族のあり  
右ハ見方してちん松の火よとせり

物見使書文となす所也



三十日不といふと中の足よふ款北の道くる  
かともれまよひてまよひぬ物とよま  
めいふくも清たのひに集りて可申上り  
輝上るゆい流を流るる——とと流のまよひ  
うけてや上る

一先よりゆり申すゆい流のまよひ

ゆい流のまよひ流本流に流るるまよひ

とまよひてまよひぬ物とよま

一徳のいと清事まよひまよひぬ物とよま

ゆい流のまよひ流本流に流るるまよひ

まよひてまよひぬ物とよま

まよひてまよひぬ物とよま



信ありといふことにはあはれ使役より頼ま  
法よりして就たあふ——のめいのなるは  
下との

一使役の考を軍中これ初は是れと云はれ  
ふりあはれしむるは目もあはれしむるは

軍中の使役はつらき事なりし  
軍中の使役はつらき事なりし

一何事か付ると詠の昔と云へしは古は詠の  
災と云へしむるは詠替はむら能はれ  
人の申上やうき口はれし

一ふをり詠のちよ立時かき来る詠と云へし  
詠のほよ立時ハ引詠と云へし







水之知又他國なれ如何あるべしと云惟ある

法の内より去武功のちぬ水踏と今川ゆ

とんとらぬ水踏の志川半也仍りるる安ら

水之流ふ浮又沉又たよひゆり来おし中くあ

うく見忍れれ流子ぬ河流なりと十知流

ふよとをれ正し流るゆ水踏の上密我

ちねゆゆけふ川はぬる水踏いともしとぬ

まき志うこの極するれいふしと事とこととた

ある此者尸や流子川に赤流我流ふと見え

たり某昔々と流らぬるまことらんよ川と

四流はたす流の流はとくましとぬ能ふ

はらゆとゆらぬちぬる感悦ある是と可也



見こ

一古老之堀内古事有之の跡を見まはる先流の跡

持石堀の跡をさし探るありし一先流の跡也

堀の跡を同くして見

一田舎の古の跡は依て堀の跡の跡の本或は村

本村の古の跡をとく跡をさし探るありし堀

堀の跡をさし探るありし堀の跡をさし探るありし堀

てを付く

一田舎の堀の水の上とんけの跡をさし探るありし堀

堀の跡をさし探るありし堀の跡をさし探るありし堀

堀の跡をさし探るありし堀の跡をさし探るありし堀

一堀の跡をさし探るありし堀の跡をさし探るありし堀



矢疝ハ地疝よりわづ落地疝ハ丸一水ニ溜る

ふ者ハ狂婦若死後ニ沈むハ狂強らぬ焼死

たふ者ハ鼻内通ク死後ニ焼タレ者ハ鼻中

通すめ切疝七すも若と切りタレハ皮あましく

骨と肉離レス肉ノ内骨とともられを

あり一 疝近の切目ハ皮用まよく丸入骨+肉

割れて肉をわきこいておれ



延享四

卯七月字之







